

## 減速する世界経済

### 論風

青山学院大学特別招聘教授

榊原 英資

国際通貨基金 (IMF) は10月15日発表の「世界経済見直し」で世界経済の2019年の成長率を3.0%と前回7月の予測 (3.2%) から0.2%下方修正した。3.0%という数字はリーマン・ショックの起きた08年 (3.0%) 以来の低水準となっている。

#### 新興国も失速

先進国全体の伸び率は1.7%、米国2.4%、ユーロ圏1.2%。日本はユーロ圏よりさらに低く、0.9%という予測だ。新興・途上国も減速し、中国は6.1%、20年は6%を切って5.8%まで下がるとしている。

1980年から2010年まで年平均10%に近い成長を達成してきた中国も、人口減少、高齢化の局面に入り、次第に成長率を落としてきているのだ。英国に本拠を置くコンサルティング・ファーム、プライスウォーターハウスクーパース (PwC) の予測によると、16~50年までの年間平均成長率は3.4%とされている。

他方、インドは比較的高い成長率を維持し、年平均4.8%の成長を達成すると予測だ。こうした状況を反映して、PwCは、50年にはインドが国内総生産 (GDP) で米国を抜いて中国に次いでナンバー2になるとしている。50年



さかきばら・えいすけ 東大経卒、1965年大蔵省 (現財務省) 入省。ミシガン大学に留学し経済学博士号取得。財政金融研究所所長、国際金融局長を経て97年に財務官就任。99年に退官、慶大教授に転じ、2006年早大教授、10年4月から現職。76歳。神奈川県出身。

## 極めて深刻との認識が必要

の購買力平価 (PPP) ベースのGDPは中国がトップで58.5兆ドル、これにインドが44.1兆ドルで続き、ナンバー3の米国 (34.1兆ドル) を抜くとしているのだ。

PwCの予測によると、50年のGDPのナンバー4はインドネシア (10.5兆ドル)、ナンバー8は日本 (6.8兆ドル) とされている。

トップ8のうち4カ国がアジアの国々。いわゆる「リオリエント現象」だ。世界経済の中心が再びアジアに戻って

きている。アンガス・マディソンの試算によると、1820年には世界のGDPの29%が中国、16%がインドとされており、両国で世界のGDPのほぼ半分を占めていたのだ。

#### 保護主義が貿易直撃

ただ、2019年はそのアジアの国々も減速。前述したように中国は6.1%、7~8%の高成長を続けてきたインドも6.1%まで減速するとしているのだ。

世界経済成長率の低下の主因は世界貿易の鈍化。19年の世界貿易の成長率は1.1%の伸びにとどまるとされているのだ。世界貿易の鈍化の主因は米国をはじめとする主要国の保護主義的政策。米中貿易摩擦の展開などが世界貿易の伸び率を抑えているのだ。

米中は閣僚級の貿易交渉などで一部の分野で合意しているものの、高い関税を上げ続けている状況は解消されていない。

こうした状況を受けて、10月18日、米ワシントンで20カ国・地域 (G20) 財務相・中央銀行総裁会議が開催されたが (日本からは麻生太郎財務相、黒田東彦日銀総裁が出席)、参加国は「緊張感を共有」したものの、協議して具体的な政策を打ち出すことはできなかったのだ。

#### 「長期停滞」の予測も

日米欧はこうした状況に対応するために、いずれも長期間の金融緩和を実施しているが、G20会議では世界的に緩和余地が減少しているとの指摘が相次ぎ、財政政策に期待する声が各国で高まりつつあるという。

10月18日の記者会見で黒田日銀総裁は「日本の金融政策の余地が限られていることはない」と強調、麻生財務相も必要性に応じて財政で景気を浮揚させる考えを改めて示したのだ。

ハーバード大学教授ローレンス・サマーズ氏 (元米財務長官) は世界経済の「長期停滞 (Secular Stagnation)」の可能性を指摘し続けているが、いずれにせよ、世界経済が極めて深刻な状況に陥ってきていることは確かなようなのだ。

### 特別対談シリーズ 「グローバルの流儀」 〈Vol.35〉

森辺一樹とゲストとの特別対談シリーズ「グローバルの流儀」。第35回のゲストは龍角散・藤井隆太社長をお迎えしての対談です。

## 「のどのケア」から社会貢献する龍角散

『ゴホン!』の元祖龍角散のキャッチコピーで知られる「龍角散」。東京都千代田区にある製薬会社、株式会社龍角散が提供するのど薬だ。江戸中期、秋田藩の家伝薬として発祥し、以来、200年以上もの時を経て今の龍角散となった。現在では龍角散シリーズに加え、服薬補助ゼリーやのど飴、医療用医薬品へとステージを広げている。現在の代表取締役社長を務めるのは、8代目にあたる藤井隆太氏。社長就任当時、龍角散は「倒産寸前だった」という。そこから会社を再生させた。そこには一体、どのようなストーリーがあったのだろうか。

#### 江戸時代から藤井家に伝承され、改良を重ねて進化した「龍角散」

森辺: まずは「龍角散」の歩みを教えてください。

藤井: 「龍角散」の原型は秋田藩の家伝薬だったので、藩主の持病である喘息を治すために、漢方薬に西洋生薬を取り入れ改良し、現在の処方基礎を確立したと伝えられています。廃藩置県によって藤井家から下賜され、一般向けの薬として販売。1893年に微粉末状の製剤となりました。

森辺: 御社の「龍角散」はビジネスではなく、「喘息で苦しむ藩主のために」という想いから生まれたものだったのです。藤井社長が就任された当時、御社の経営は火の車だったそうで

すが、それをどのように立て直したのでしょうか。

藤井: 私はプロの音楽家として活動しながらサラリーマン生活を送っていました。1994年、先代である父の病気が発覚し、突然呼び戻される形で龍角散に入社。多額の負債があることが分かったのです。翌年、社長に就任したものの、組織を変えるというより壊すしかなく、徹底的なトップダウンで経営改革を行っていきました。新商品の開発では、微粉末を飲みやすくした「龍角散ダイレクト」を発売。そして、98年に「龍角散嚥下補助ゼリー」を開発し、これが当社の新商品の一番の成功例となりました。このような売れる図式を作ってから工場の効率化を行うことで、固定費を増やさずに売上増を

達成することができました。そのおかげで借金を返済し、現在の良好な状態までもってこることができました。

#### インバウンド、越境EC、現地向け販売というプロセスで中国でも成功

森辺: 海外展開はいかがですか。  
藤井: 家庭薬では1945年から、台湾、韓国、香港、アメリカなどへの輸出をスタートしています。また、中国からのインバウンド顧客による需要増を受け越境ECへ事業拡大、2019年には中国OTC医薬品の大手メーカーである華潤三九とパートナーシップを締結することを発表し、中国市場へ展開する運びになりました。

森辺: 最後に、今後の展望をお聞かせください。

藤井: 数十年後は、セルフメディケーションがますます見直される世の中になっていくと思います。そうなるので、当社はまだまだ社会貢献できる余地があるでしょう。「のどから体調を崩すことが多いから、早めにケアしておいてください」というポリシーが、当社にとっての正しい道だと考えています。



1974年生まれ。大手を中心に1000社を超える企業に対して、15年以上にわたるアジア新興国展開支援の実績を持つ、海外販路構築のスペシャリスト。

森辺 一樹  
スパイダー・イニシアティブ  
代表取締役社長



藤井隆太 (ふじい りゅうた)  
株式会社龍角散 代表取締役社長  
1959年東京都生まれ。84年桐朋学園大学音楽学部研究科修了後、大手製薬メーカーに入社。三菱化成工業 (現・三菱ケミカル) を経て、94年龍角散入社。95年代表取締役社長に就任。世界で初めて開発した服薬補助ゼリー「らくらく服薬ゼリー」「おくすり飲めたね」のヒット、基幹商品「龍角散」の姉妹品「龍角散ダイレクト」の投入などで累積赤字を一掃。売上を就任時の5倍まで伸ばす。また、フルート奏者としてコンサートへの出演や後進の指導にもあたっている。

イノベーションズアイWEBサイトで全文掲載中!  
http://global.innovations-i.com